

## 五才児における言語発達 とその指導について



角尾 和子

幼児の言語指導すなわち、話し方、聞き方に関する教育をどのようにしたらよいか。できれば言語指導の系統を考えてみたい。これが本研究の目的である。

大正年間の中頃から我が国にも、幼児語兒童語の研究熱がさかんとなり、幼児の言語生活の実態をとらえた研究物がたくさん残されている。集めることが出来た文献だけでも次のようなものがある。

- (大正七年) 東京成城小学校 沢柳氏)
- (大正十二年) 長野県松本女子師範附属小学校 上条茂氏)
- (昭和九年) 岡山師範附属小学校)

森脇、牛島氏のものがあった。また両氏の幼児の文章の構造についての研究が残されている。

また角度を変えた研究として昭和十四年十四年にわたる阪本一郎氏の兒童読物にあらわれた語を集めて頻度別に五段階五〇〇語の幼年基本語いを定めたもの、それから柳田国男氏の全国共通に幼児が言葉をおぼえる順序があるとこの考えから、集録分類された『分類兒童語い』という研究が残されている。これらの研究の結果から一応幼児教育者が幼児に向って話す語いはこの程度にということがきめられる。

(昭和十四年) 長野師範学校男子部附属国民学校)

などは何れも就学したばかりの一年生を観察して、どれだけの理解語い・使用語いをもつかという調査であった。

しかし毎日現場で動きまわる幼児を相手にして言語指導を考えると、単語をとりたてての分析研究よりも、生きて働く語いに意味があるように考えた。

幼児の心の機能の発達とも関係ずけて、幼児を受けもちなから出来る方法で動く幼児の言語生活をとらえ、そこから結論へ導ききたいと努力した。

しかし三年という月日はただ一人で進めていく研究にとって長い月日ではない上に、分野が広いために研究が何れも部分に止まってしまったことは残念なことであった。ここでは紙面も限られているので、この度の文部省実験幼稚園研究発表会の報告の概要を述べて責めて果したいと思つた。

- 一、問題の所在
- 幼児の生活にしみこむ、幼児に適した言葉について調べたい。
- 従来おこなわれて来た教師の勤によるのではなく、幼児の各年令段階で理解できる内容はどんなものでありまたどんな程度であるか。
- 言語習得に形式があるだろうか。あればそれを調べて指導上の参考にした。

○幼児の言語機能はどのような能力をもっているか。

○幼児の文字指導についてはどうしたらよいか。

このような問題を解明するために、次のように焦点をしばって考えていった。

## 二、話の理解について

教師が与える「お話」を、どのくらいおぼえて復唱することができるか。これを年長組のグループと年少組のグループと二組対比して調べることによって、発達的な理解度の差異をさぐることにした。

集団で話をきくということは幼児にとって難しいことである。単に幼児の基本語いの範ちゅうだけでない、他の要素が加わってきている。そこで記憶と理解とを合せたままの測定はむじゅんするか、グループ全体を処理するためにはこの方法以外になかったので、話を記憶させ再生する量と質を吟味して集計する方法をとった。

これを前後四回行った結果

○四才児と五才児の間には、はっきりと相異がみられる。

○紙芝居と「お話」とを比べると、視覚に訴

えた効果は四才児の方が五才児より大きいものがある。

○集団生活を年々つづけると、この場合の話の理解度が一年半つづけているグループと近ずいてくる。集団生活の話の理解の面に於ける効果というべきであろうか。

○放送劇は瞬間的な楽しさはあるらしいが、

年少者程、頭の中に画かれるイメージが断片的であり、つながりがないようである。

○事件の核心、あるいは登場人物が活躍する場面をまず話し出す例が多い。そして何故

そうなったかと理由つけて話をするものほど幼児の場合に理解度が高いようである。

すなわち帰納的な推理はこの場合まだ芽ばえがみられないというべきであらうか。

## 三、幼児の言語表現の種々相

### (1)創作

子どもたちのつくる話を記録してみた。

同じ話を二度させて記録するには、紙芝居のようにしくむとよい。子どもの創作

による話の中では、大人が与えている時代のものの童話で満ちたりないのみをみた

しているののみつけた。例えば現実的な物のみかた、科学的な知識の応用など。

### (2)行動の報告

子どもの自由な活動の状態を観察し記録しておき『今日あさから何をして遊んでいたか話して下さい』という。これはよく経験話をさせるときに用いる質問であるが、考えねばならないことが含んでいた。

それは面白そうに(観察者)遊んでいたときのこと程子どもは忘れていたということである。遊びの間子どもは何も意識しないで楽しんでいのではないだろうか。そこで行動報告をもって言語指導の「こまにする」ということは、あまりにも形式的であるといわなければならぬ。

### (3)表現の複雑度についての考察

長々ととりとめもないおしゃべりをする子がある。またポツンポツンとしかしゃべらぬ子どももある。どちらも用は足りるが、このこともたちの話の複雑さの度合をはかる物指しとしてこんなことを考えてみた。

・絵をみせて話をさせる。(CATの十枚の図版を用いた)

・理由の「から」を伴なう、従属文の頻数

を五才児二十名の各幼児について調べてみた処、

絵をみてつくった話の量の多い子どもでも然も智能的にすぐれている子どもにも頻数が多く、おしゃべりでも智能が低いもの、智能的にすぐれていても口の重い子どもには十枚の絵に対しての話の中に「理由のから」は一つもみられないという結果を示した。

事例は少ないが、形容詞の使用の多少と共に、言語表現の発達の程度をきめる尺度になるのではないかと思われる。

#### (4) 対話及び会話について

四五才の子どもたちは二人でなら互に意志の通じあいを言葉によって行なうことができる。三人以上の子どもたちは集まって何か一つことについて話をしていような形はしていても、会話の形態にはなっていないようである。

そこで教師が仲立ちとなつての民主的な会話の形が充分育てられる必要があると思われる。

#### (5) 伝達

幼児は家庭への伝達事項をどの程度確か

に伝えているだろうか。そんなことの一つの考察法として、

ローラースケートは

- ・あぶないから買ってはいけない。
- ・何故かというところぶと頭の骨がわるからなどの理由。
- ・中学生になったらやってもよい。
- ・その場合も道路でない適当な場所である。

と話して帰し、三日後にどんな報告をしたか父兄に記録してもらった。

結果を整理してみると、男子は八五%、女子は五六%完全に報告していた。

そして男子の中には「中学に行ったら買ってもらいなさいといった」と自分の希望を加えて報告しているのみみられた。理解できて子ども興味の深さの方向によって、こんなに伝達のしかたがちがうところがでてくるようである。

このあと読字指導の問題を含めて、言語指導の具体的な目標、カリキュラムの問題が残るのであるが、長くなるので一応筆をおく。

近刊おしらせ

広島大学教授 莊司雅子著

## フレールの教育学

付頁400  
カバー540  
本判価  
製本540  
上A定

東京学芸大学附属竹早小学校教諭 渡辺茂江 共著  
東京学芸大学附属幼稚園教諭 渡安藤寿美

保育のためのうたとリズム

## めだかのくに

付頁200  
装60  
麗判価  
美B予5

株式会社 フレール館

近刊おしらせ